

# 小・中・高における短時間の「人間関係づくりプログラム」の 効果的な活用に関する調査研究（1年次）

大分県教育センター教育相談部

指導主事 桐野 愛

## I 研究の背景

「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」（文部科学省）によれば、いじめ・不登校の問題は未だ改善されず、大分県でも継続的な問題となっている。その背景には、家庭や地域社会の変化により、人間関係を作るスキルを身につける機会が減少していることがあると考えられる。大分県教育委員会でも、この問題の解決に向けて、「人間関係づくりプログラム事業（児童生徒同士の良好な人間関係を構築し、いじめ・不登校をうまない魅力ある学校づくり）」を進めている。

## II 現状と課題

大分県教育委員会は、令和2年度に、地域児童生徒支援コーディネーターを配置した小・中学校22校と、実践研究モデル校に指定した高校4校で、短時間で継続的に行う「人間関係づくりプログラム」の取組を進めた。さらに、令和3年度からは県内の全小・中・高等学校において、その取組が始まった。

県教育センターでは、平成27・28年度に、冊子「大分県版人間関係づくりプログラム（小学校・中学校・高校編）」を作成し、全公立学校に配布している。また、令和2年度は「短時間の『人間関係づくりプログラム』の効果的な活用に関する研究」を小学校1校・中学校1校に協力を依頼して進めてきた。

昨年度の調査研究の結果、小・中においては、短時間の「人間関係づくりプログラム」を実施することの有効性が明らかになりつつある。しかし、高校においては、十分な実践を行うことが難しく、有効性の検証には至らなかった。また、上記の指導資料は、必ずしも“短時間”で実施できる「人間関係づくりプログラム」には対応しておらず、活用できにくい現状にある。さらに、学校安全・安心支援課が行ったアンケート調査では、短時間の「人間関係づくりプログラム」の実践は始まったばかりで、各学校における取組状況にばらつきがあり、組織的・継続的な取組が行われているとは言い難いことが指摘されている。

## III 調査・研究の目的と内容

### 1 調査・研究の目的

小・中・高等学校において、短時間の「人間関係づくりプログラム」を組織的・継続的に取り組むことが、児童生徒の人間関係をつくる力を育成するために有効かを検証する。また、学校において組織的・継続的に実施する上での効果的な取組や課題を明確にする。

### 2 研究協力校で短時間の「人間関係づくりプログラム」を実施

県内の同地域に所在する研究協力校の全学級で、表1の時間帯で短時間の

表1 研究協力校の学校規模と、「人間関係づくりプログラム」の実施時間帯

研究協力校	学校規模	実施時間帯
公立小学校1校	各学年1学級、20人前後在籍	毎週火曜日（昼休み後）13:25～13:40
公立中学校1校	2学年2学級、20人前後在籍 1・3学年1学級、30人前後在籍	毎週金曜日（朝自習）8:00～8:15
県立高校1校	各学年4学級、30人以上在籍	隔週火曜日（終礼前）16:05～16:15

## 大分県教育センター教育相談部

「人間関係づくりプログラム」を実施した。

令和3年4月～令和4年3月の間、県教育センターから担当の指導主事が、各学校を2か月に1回程度訪問し、実施後に検討する内容や方法について助言を行い、課題を把握した。

### 3 研究協力校会議の実施

令和3年7月、10月、12月に、研究協力校3校の担当者に加え、指導助言者として大分大学教育学部教授藤田敦氏が出席し、各校の短時間の「人間関係づくりプログラム」の実施に伴う課題とその解決に向けた研究協議を行った。協議で明らかになったプログラムの有効活用の方法を共有し、各校の実践に生かした。

### 4 研究協力校での2回の「hyper-QU」(小・中学校)「WEBQU」(高校)結果の比較

短時間の「人間関係づくりプログラム」の実践効果を測定するため、小学校では6月と11月、中学校では7月と12月に「よりよい学校生活と友達づくりのためのアンケート hyper-QU」(以下 hyper-QU という)を実施、高校では8月と1月に WEBQU を実施し、その結果を比較した。

### 5 短時間の「人間関係づくりプログラム」を活用するにあたって実施前後の教師の意識変化に関するアンケート

プログラム活用にあたっての教師側の意識の変化を測定するため、プログラムの実施初期(8月)と後期(12月)にアンケート調査を実施し、その結果を比較した(表3)。

### 6 短時間の「人間関係づくりプログラム」の教材開発と資料活用

すでに各学校へ配布している「人間関係づくりプログラム」の指導資料を基に、実践の手引き・短時間プログラムに対応した資料・実践資料集を作成し、YELL(教職員研修申込みシステム)にアップロードし、随時活用できるよう整えた。

## IV 調査・研究の結果

### 1 協力校における短時間の「人間関係づくりプログラム」の実施

前年度から継続の研究協力校2校(小学校1校・中学校1校)については、令和2年度の「hyper-QU」の結果分析や調査研究で明らかになった成果と課題を踏まえ、担当教員を中心に年間実施計画や学期実施計画を作成し、全職員共通理解のもと、全学年でプログラムを実施した。【別添資料1, 2】

本年度が「人間関係づくりプログラム」1年目となった高校1校においては、前年度1月と今年度4月2日に全職員対象の校内研修を行った。実施理由・目的などを理解した上で、短時間の「人間関係づくりプログラム」の一連の流れを確認し、数種類のエクササイズを体験した。それを踏まえて、担当を中心に年間実施計画を作成し、全学年でプログラムを実施した。【別添資料3】

＜小学校＞昨年度の資料を活用・検証しつつ、今年度のニーズに合った新しいエクササイズを取り入れて実践を積み重ねた。県教育センターから提供した資料を事前に職員で研修し、学年の実態に合わせたルールや内容に作り変えて実践していた。初回訪問時に、児童同士でやりとりを長く維持できず、取組に改善が必要なクラスがあったが、12月訪問時点ではルールを守り落ち着いて活動に取り組んでいる姿が見られ、「人間関係づくりプログラム」がすべてとは一概には言えないが、児童同士の関係に効果があることが窺えた。

＜中学校＞年度当初から「生徒会専門部ごと(縦割り活動)」と「学級ごと」で交互にプログラムを実施し、全校で人間関係づくりに取り組んだ。専門部ごとの取組では、3年生の専門部長がリーダーとなり生徒主導で人間関係づくりプログラムを進め、教職員は各担当専門部に分かれて活動をサポートした。プログラムの

## 小・中・高における短時間の「人間関係づくりプログラム」の効果的な活用に関する調査研究

経験が3年目となる生徒会執行部が、主体的にエクササイズの内容を考えたり、グループ決めをしたりすることもあった。生徒会担当の教職員は、生徒による打合せや実施をサポートした。また、研究協力校会議での実践交流を活用し、ロイロノートを使った振り返りシート入力や生徒の実態に応じたエクササイズの内容変更、職員研修における事前の共通理解など、活動と並行して改善を繰り返し独自のスタイルを作り上げていった。

<高校>初年度の利点を活かし全職員の共通理解を十分に行った上で活動を開始した。担任が主指導をするが、全てのクラスで副担任とのティームティーチングで生徒の支援を行った。校内の保健・教育相談部で内容を練り、「アドジャン」や「二者択一」のお題は部内で協議し作成した。毎回、保健・教育相談主任がワンプーパーにまとめた「プログラムの進め方」とエクササイズの教材を配信し、Teams上で職員間共有することで、打合せと準備の時間を短縮できた。

管理職が巡回しながら実施状況を把握し、担当に助言を行う学校組織としての取組が見られたことが、すべての校種において共通していた。

県教育センターは2か月に一度の訪問で進捗状況を把握し、活動観察を経て指導助言を行ったが、3校とも、年間を通して計画通りに実施できたことが確認された。

## 2 研究協力校会議の実施

定期的な年3回の研究協力校会議では、各学校での取組の報告を受け、他校の工夫された実践を自校の実践に取り入れ改善につなげた。会議の中で、担当者間の質問や助言者への質問などから、プログラムの工夫や多面的なクラスの実態把握の方法など、取組自体をブラッシュアップしていく会議となった。助言者からは、「人間関係づくりプログラム」自体の成果だけでなく、授業やそれ以外の場面においてプログラムが及ぼす効果を検証することの意義などの有益な示唆があった。

## 3 「hyper-QU」(小・中学校)「WEBQU」(高校)結果の比較

表2 研究協力校での2回の「hyper-QU」(小・中学校)・「WEBQU」(高校)結果(学級満足度尺度より)

	承認得点(点)		被侵害得点(点)		学級生活満足群(%)		学級生活不満足群(%)		侵害行為認知群(%)		非承認群(%)					
	1回目	2回目	1回目	2回目	1回目	2回目	1回目	2回目	1回目	2回目	1回目	2回目				
小1	21.5	21.0	7.3	7.9	全国平均 42	91	86	全国平均 22	0	5	全国平均 17	0	5	全国平均 19	9	5
小2	19.9	21.5	12.6	8.9	1回目平均 58	40	73	1回目平均 10	13	13	1回目平均 18	40	7	1回目平均 14	7	7
小3	17.7	18.0	11.5	11.0	2回目平均 69	43	48	2回目平均 10	17	13	2回目平均 10	13	17	2回目平均 11	26	22
小4	19.2	20.4	10.1	7.8	全国平均 43	48	80	全国平均 23	16	0	全国平均 16	20	4	全国平均 18	16	16
小5	19.8	19.1	9.7	9.6	1回目平均 63	52	46	1回目平均 13	17	17	1回目平均 13	13	17	1回目平均 11	17	21
小6	21.1	20.2	7.4	7.9	2回目平均 69	90	80	2回目平均 7	5	5	2回目平均 10	5	10	2回目平均 14	0	5
中1	36.5	39.6	19.2	17.4	全国平均 41	51	66	全国平均 28	21	16	全国平均 13	10	8	全国平均 18	18	11
中2	39.6	40.7	14.9	15.7	1回目平均 70	78	64	1回目平均 11	8	10	1回目平均 4	2	12	1回目平均 15	12	14
中3	41.2	41.2	14.7	15.7	2回目平均 68	81	73	2回目平均 13	4	12	2回目平均 11	0	12	2回目平均 10	15	4
高1	34.7	35.7	15.7	15.6	全国平均 40	62	66	全国平均 23	7	1	全国平均 15	14	16	全国平均 22	16	15
高2	32.8	34.4	16.0	15.9	1回目平均 58	55	66	1回目平均 9	10	9	1回目平均 13	13	10	1回目平均 18	21	14
					2回目平均 66			2回目平均 5			2回目平均 13			2回目平均 14		

\* 赤のセルは、2回目の検査で好転した数値である。

\* 承認得点と被侵害得点は、小学校(6項目×4点=24点満点)・中・高等学校(10項目×5点=50点満点)である。

\* 高校「WEBQU」の全国平均率は集計中のため、参考数値としてhyper-QUの全国平均率を記載している。

中学校の数値と比較しても、高校がいかにも高い数値がわかる。

## 大分県教育センター教育相談部

2回の結果を比較すると、学級生活満足群の割合が 11 学年中 6 学年で上昇していた。残りの 5 学年は少しの下降が見られたが、全国平均値と比較すると非常に高い数値にはなっている。

特に、課題を抱えていたクラスにおいて、学級生活満足群が 40%→73%と大幅に変化したケースがあった。当初、侵害行為認知群や非承認群にいた児童が学級生活満足群へ移ったためである。「人間関係づくりプログラム」に取り組む姿が変容したという観察報告を裏付ける hyper-QU の結果であった。

#### 4 教職員の意識変化のアンケート結果

研究協力校 3 校の教職員 49 人に対し、実施初期（8 月）と実施後期（12 月）の教師の意識の変化について、アンケート調査を行い、表 3 の結果が得られた。

表 3 短時間の「人間関係づくりプログラム」実施前後の教師の意識変化

8月と12月を比較して、 赤数字(ピンクセル)は上昇、青数字(下線)は下降を表している。		小学校		中学校		高校	
		8月	12月	8月	12月	8月	12月
【1】次のような項目に、短時間の「人間関係づくり」プログラムは影響を与えていると思いますか。	(1)ー1 児童生徒間の友だち関係作り	3.5	3.5	3.3	4.0	3.3	3.2
	(2)ー1 教師と児童生徒との関係づくり	3.3	2.8	2.6	2.9	2.6	2.6
	(3)ー1 学級内での児童生徒の居場所づくり	3.3	3.2	3.1	3.1	3.1	3.0
	(4)ー1 学級・クラス内の関係づくり(学級・クラス経営)	3.3	3.4	3.4	3.6	3.2	3.0
	(5)ー1 各教科等の授業	2.9	3.0	2.8	3.2	2.5	2.6
	(6)ー1 授業以外の活動	3.0	2.8	3.0	3.0	2.6	2.7
【2】短時間の「人間関係作りプログラム」に取り組んで、	(1)ー1 4月からの児童生徒の変化を感じますか。	2.6	3.2	3.0	3.0	2.5	2.8
	(2)ー1 先生自身の児童生徒への接し方等、生徒指導や教育相談に関わる指導及び支援に変化はありますか。	2.8	3.2	2.7	2.6	2.5	2.4
	(3)ー1 教員同士の関わりに変化はありますか。	2.5	2.5	2.1	2.0	2.0	2.0

4・3・2・1の4段階で評価し、点数が高いほど肯定的な意識を意味している

【2】- (1) - 1 「短時間の『人間関係づくりプログラム』に取り組んで、4月からの

児童生徒の変化を感じますか。」という質問に対して、中学校は 3.0 と高いポイントを維持し、小学校では 0.6、高校では 0.3 ポイント上昇している。「感じる・やや感じる」と回答した主な理由は以下の通り。

- ・関わり方が、あたたかいなあと思う場面がよくある (小)
- ・すべての学年ではないが、児童間のトラブルは減った (小) 子ども同士のトラブルが少ないから (中)
- ・生徒の関係性の広がりが見える点とコミュニケーションを取ろうとする生徒の姿勢からそう感じる (高)
- ・この活動で新たな関係性ができたと思われる生徒もいる。クラス内の個々の人間関係が発展している (高)

【1】- (5) - 1 「各教科等の授業に、短時間の『人間関係づくりプログラム』は影響を与えていると思いますか。」という質問に対しては、すべての校種でポイントが上昇した。昨年度の調査研究の課題として、人間関係づくりプログラムの学校生活全般へのつながりが不十分であることがあげられていたが、すべての校種で7月に比べて12月に各教科の授業等に効果が出ていることがわかった。「思う・やや思う」と回答した理由は以下の通り。

- ・ペアやグループでの活動がスムーズになったように感じる (小) (中) (高)
- ・意見を言ったあとの反応が良くなり、認められていると感じられる場が増えたと思う (小)
- ・グループでの話し合いをする場面や、友だちの考えをきいてうなずくなど何らかの反応をする場面がある (小)
- ・安心して考えを伝え合える雰囲気、コミュニケーション能力を育てる素地となっている (中)
- ・他の人の意見を参考にすることができる (中)
- ・よく話す人ではなくても、スマイルタイムで話した経験のある人とグループ学習になったら良い意味で緊張感はなく話し合い活動ができると思う (高)
- ・ペア活動をする時も笑顔で「お願いします」と言えるようになった (高)



小・中・高における短時間の「人間関係づくりプログラム」の効果的な活用に関する調査研究

【1】- (6) -1 「授業以外の活動に影響を与えているか」については、数値上は大幅な変化はないものの、「思う・やや思う」と回答した理由については、以下のような回答があげられた。

- ・休み時間のトラブルがこの時間でクールダウンされる場面がある (小)
- ・行事の取組などでも、お互いの気持ちを大切にしている場面が見られた (小)
- ・学年をこえて行うこともあるため、普段話せない人とも話せる (中)
- ・休憩時間等の居場所ができる (高) 自由時間に一人である生徒が減ったように思える (高)
- ・生徒の中には、話しかけ方などの要領を学んでいるようである (高)

## V 考察

### 1 成果

本研究での短時間の「人間関係づくりプログラム」の活用について、研究協力校3校の実際の取組状況やhyper-QU・WEBQUと教職員の意識変化のアンケートの結果の分析から、プログラムの実施前後で児童生徒の変化を明確に認めることができ、魅力ある学校・学級づくりを行う上で有効であると考えられる。さらに、「人間関係づくりプログラム」の取組が、その時間だけの居場所づくり・絆づくりに留まらず、各教科の授業を始めとする学校生活全般にも良い影響を及ぼしていると思われる。このような成果に結びついたと考えられる要因を3点あげる。

#### (1) 組織的取組

管理職のリーダーシップの下、学校体制の中に「人間関係づくりプログラム」を担当する分掌が設置され、担当教員が年間実施計画・学期実施計画を作成し、全教職員の共通理解が図られたことで、継続的な実施が可能になり、学校の組織的な取組が前進したと思われる。また、教職員や児童生徒への周知の方法・実際の取組方法など、実態に応じた取組を進めることができたと考えられる。

#### (2) 継続的取組

2回の各検査結果と教職員アンケートの数値及び教員の長期観察によるコメントが好転したことから、継続的な取組が児童生徒の人間関係をつくる力の育成に有効であることが考えられる。さらに、中学校・高校においては、生徒自ら「人間関係づくりプログラム」を行う良さを見出し、生徒がエクササイズの内容やグループ編成を考えるなどの主体的な活動へもつながることが分かった。

#### (3) 実践交流の場の設定

調査研究協力校会議において実践交流をしたことで、自校の課題が解決でき、新しい取組につなげることができたと思われる。短時間の「人間関係づくりプログラム」の取組期間が短く、実践報告も少ないため、実践交流が貴重な情報を得る機会になることが分かった。また、資料活用の場として大分県の全ての教職員が閲覧できるYELL(教職員研修申込みシステム)を使い、資料を随時アップロードしていくことは、学校の取組を進める上で有効と考えられる。

## 2 課題

今後、他の小・中・高等学校においても継続して取組を進めることを念頭に置き、教職員アンケートから見えてきた課題を2点明記する。

- ・高校においては一定の効果はあったものの、実施初年度の「人間関係づくりプログラム」の生徒への効果や各教科等の授業内での効果について、小中学校よりも0.5ポイント低く、「実感できない」「因果関係は無い」の回答も複数みられた。原因が、取組年数の短さからくるものなのか、発達段階によるものなのか明らかにする必要がある。

## 大分県教育センター教育相談部

・高校において、生徒に行った WEBQU の結果では、12 項目中 11 項目で数値が上昇しているが、教師アンケートによると「友だち関係づくり」「居場所づくり」「クラス内の関係づくり」などの項目で変容が少ないことが分かり、結果のアンバランスさの原因を調査する必要がある。

調査研究を通して、学校生活全般で児童生徒の変容を教職員全体で感じることができており、短時間で継続的に行う「人間関係づくりプログラム」は、児童生徒の居場所づくり・絆づくりに効果があると考えられる。そのことが、いじめ・不登校の未然防止にもつながると思われる。

県内の全小・中・高等学校における実施はまだ1年目を経過したところである。魅力ある学校づくり、いじめ・不登校の未然防止等、今後の更なる変容を期待して、県教育センターが行う研修・支援を充実させていきたい。

## VI 参考文献等

・「令和2年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」（2021 文部科学省）

小・中・高における短時間の「人間関係づくりプログラム」の効果的な活用に関する調査研究

【別添資料1】

小学校・短時間の「人間関係づくりプログラム」年間計画（案）

○活動時間：毎週火曜日（昼休み後）13：25～13：40

実施月			エクササイズ (めあて)	内容	このエクササイズのねらい
5月 11日 18日 25日			先生の〇×クイズ (先生のことを 知ろう！)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・全員（先生対全員）</li> <li>・進め方やルールを確認しながら行う。</li> <li>・先生についてのクイズを聴き、〇か×でジェスチャーや手を上げさせる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教師の自己開示により、子どもとのリレーション（ふれあいの関係）を作る。</li> <li>・今後のエクササイズで、子ども同士が問題を出し合う時のモデルを示す。</li> </ul>
6月 1日 8日 15日	9月 28日		しつもん ジャンケン (友だちのこ とを知ろう！)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ペア (※縦割り班の小グループで)</li> <li>・ジャンケンしながら、お互いに質問しあう。</li> <li>・気になったことを詳しく聴き合う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分のことを、はっきり伝えることができる。</li> <li>・友達の話を最後まで聴くことができる。</li> <li>・友達の話をうなずきながら聴くことができる。</li> </ul>
	10月 19日 26日	1月 11日 18日 25日		<ul style="list-style-type: none"> <li>・ペアもしくはグループ</li> <li>・2つの選択肢から1つを選び、自分の選んだものを伝え合う。</li> <li>・お互いに選んだ理由を伝え合う。</li> </ul>	
6月 22日	11月 9日 16日 30日	2月 1日 8日 15日 22日	アドジャン (自分や友だちの ことを知ろう！)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ペアまたは4人グループ (※縦割り班で)</li> <li>・「アドジャン」のかけ声に合わせて片手で指を出し、合計した数でお題に答える。</li> <li>・お互いに気になったことを聴き合う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分のことを知る。</li> <li>・友達のことを知る。</li> </ul>
7月 13日	12月 7日	3月 1日	いいとこみつけ (自分や友だちのいい ところを知ろう！)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・お互いに良いところを、カードを通して伝えていく。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・友達のよいところを見つける。</li> <li>・自分のよいところに気づき自己肯定感を高める。</li> </ul>

○子どもたちの様子に応じて、学年毎に内容を検討する。場合によっては、変更もありうる。

○各エクササイズの内容を、事前の職員研修で体験し、検討する。

○状況に応じて、縦割り班の小グループでの活動を取り入れる。

## 大分県教育センター教育相談部

**【別添資料2】**

中学校・短時間の「人間関係づくりプログラム」学期計画（案）

○活動時間：毎週金曜日（朝自習）8：00～8：15

○生徒会専門部ごと（縦割り班活動）で実施する

1学期	日	内容	日	内容
4月	16	アドじゃん(1学期初め ver.) ※コロナウイルスの感染状況に応じて		
5月	7	アドじゃん	21	アドじゃん
6月	18	アドじゃん(1学期終わり ver.)		
7月	9	二者択一		

2学期	日	内容	日	内容
9月	10	アドじゃん(2学期初め ver.) ※コロナウイルスの感染状況に応じて		
10月	15	二者択一	22	すごろくトーク
11月	6	アドじゃん(文化祭を終えて ver.)	19	動物マンション
12月	3	すごろくトーク	10	アドじゃん(2学期終わり ver.)

3学期	日	内容	日	内容
1月	14	アドじゃん(3学期初め ver.)	21	二者択一
2月	4	いいとこ四面鏡	25	アドじゃん(いよいよ卒業 ver.)
3月	11	すごろくトーク	18	アドじゃん(いよいよ進級 ver.)

 上記以外の金曜日で行事等がない場合は、**学級ごと**に実施する



小・中・高における短時間の「人間関係づくりプログラム」の効果的な活用に関する調査研究

【別添資料3】

高等学校・短時間の「人間関係づくりプログラム」年間計画（案）

○活動時間：隔週火曜日（終礼前）16：05～16：15

令和3年度 『スマイルタイム』年間計画					
実施時期		内容	めあて	構成人員	
1 学 期	5月	11	生徒向けオリエンテーション	『スマイルタイム』の目的、具体的な取組内容について知る。	クラス：グループワーク
		25	アドジャン	『スマイルタイム』の流れを知る。クラスの友だちのことを知る。	クラス：ペアワーク
	6月	8, 15	二者択一	クラスの友だちのことを知る。自分のことを相手に伝える。	クラス：3～4人グループワーク
	7月	6, 13	いいとこ四面鏡	友だちの良いところを見つける。自分の良いところに気づく。	クラス：3～4人グループワーク
2 学 期	8月 9月	24 7, 21	アドジャン	自分のことを相手に伝える。相手の考えを受け入れる。	クラス：ペアワーク or 3～4人グループワーク
	10月	12, 26	二者択一	自分のことを相手に伝える。相手の考えを受け入れる。	クラス：ペアワーク or 3～4人グループワーク
	11月	9, 16	1分間スピーチ (1週間のエピソード)	話を簡潔にまとめて相手に伝える。相手の考えを受け入れる。	クラス：ペアワーク
	12月	14, 21	いいとこ四面鏡	友だちの良いところを見つける。自分の良いところに気づく。	クラス：3～4人グループワーク
3 学 期	1月	18, 25	アドジャン or 二者択一	自分のことを相手に伝える。相手の考えを受け入れる。	クラス：3～4人グループワーク
	2月	1, 8	1分間スピーチ (1週間のエピソード)	話を簡潔にまとめて相手に伝える。相手の考えを受け入れる。	クラス or 学年：ペアワーク
	3月	15, 22	いいとこ四面鏡	自分や友だちの良いところに気づく。友だちからの評価を受け入れる。	クラス：3～4人グループワーク